

稲荷山 長崎県

むかし、あるところに、おじいさんとおばあさんがいて、子牛をかっていました。

ある日のこと、おじいさんは、子牛に草を食べさせようと、稲荷山へ連れて行って、松の木につないでおきました。夕方、子牛をむかえに來ると、松の木が引っこ抜けていました。根元を見てみると、板のような石がありました。板石をそろっとどけてみたら、かめがうまつていて、中に大判小判がいっぱい入っていました。おじいさんは、おどろきました。板石を元のようにかぶせて、子牛を引いて家に帰りました。

「おばあさん、おばあさん。今日は山で牛があばれて、松の木が引っこ抜けておったぞ。根元に板石がはまつていたから、どけてみたらかめがあつて、大判小判がいっぱい入った」

おじいさんがいうと、おばあさんは、

「おじいさん、そのお金、持つて来ようよ」といいました。

「いやいや、わしに授かったお金なら、わざわざ持つて来なくても、むこうから来る」その話を、となりのおじいさんが聞いていました。となりのおじいさんは、さっそく稲荷山に行きました。そして、引っこ抜けた松を見つけると、根元の板石をどけてみました。すると、かめの中に、くまんばちが、いっぱい入っていて、ぶんぶんいっています。

「あいつ、うそをついたな。ようし、これをついでいって、くまんばちに刺し殺させてやろう」

腹を立てたとなりのおじいさんは、半纏をぬいでかめにかぶせて持つて帰りました。

そして、おじいさんの家の戸をたたいて、

「これ、これ、もう寝たかいな。用があるから、ちよいと開けてくれないか」といいました。

おじいさんが戸を開けると、となりのおじいさんは、「それっ」といって、かめを家の中に投げこみました。すると、かめの中から、大判小判ががらと音をたててあふれ出ました。部屋はお金でいっぱいになりました。おじいさんは、

「おばあさん、おばあさん。ほら、お金がむこうから来たぞ」といいました。

それから、ふたりは、安樂に暮らしたということです。